

# 人形姫

山本幸久

## 第二回

2

女の子から手紙なんてひさしぶりだ。

ボート部のキャプテンだった高校二年の頃は、ほぼ毎日のように貰<sup>も</sup>っていたものである。直接手渡されることもあれば、下駄箱<sup>げたばこ</sup>や机の中、ボート部の部室のドアに貼ってあることもあった。郵送も多かった。学校宛に送ってくる他校の生徒もいたくらいだ。数えたこととはないが、二千通は越えていたにちがいない。

段ボール箱に詰めて三箱分だったが、いまは一通たりとて残っていない。結婚直前、燃えるゴミの日にだしたのである。なにかのきっかけで、元嫁に見つかったら面倒なことになると思ったからだ。

ただし今回の手紙は色恋沙汰<sup>いろこいざた</sup>とはまるで無縁だった。送り主は半

年前に入社したばかりの社員だ。二十三歳なので、女の子とは言い難いかもしれない。五日前、酔っ払った宮沢に胸を鷲掴みにされた彼女だ。そのまま職場を飛びだしていつて以来、彼女に電話をしても留守録で、メールやラインを送っても梨の礫だった。今日も姿を見せないようであれば、鐘撞市内の彼女のアパートを訪ねようかと考えていた。それが今朝、彼女からの手紙が森岡人形本社に送られてきたのである。

郵送物を取りに行くのは、経理部長の幸田と決まっていた。いつからなのか、なぜそうなったのかは知らない。請求書や領収書といったお金がらみの類が多いからかもしれないが、はたしてどうだろう。

なにせよ九時半過ぎに郵便配達のバイクの音が聞こえると、幸田はどんな作業のときも中断し、そそくさと事務室をでていく。配達のひとも慣れたもので、表に姿を見せた幸田に郵送物を渡す。事務室は一階で正面玄関のすぐ脇なので、窓に目をむければ、そのやりとりが見えた。「ご苦労様でえす」「ありがとうございます」「と幸田と配達のひとつが挨拶を交わす声まで聞こえてくる。

今日もそうだった。いつもとちがったのは、事務室に戻ってくるなり、幸田が恭平のもとへ足早に寄ってきたことだった。血相変えてとまでいかずとも、やけに深刻な面持ちで、封書をさしだしてき

た。それがこの手紙だったのだ。

恭平はすぐさま封を切り、中身を取り出した。三枚の便箋びんせんには縦書きで、達筆な文字が並んでいた。いきなり工房を飛び出したうえに、音信不通だったことを詫わびてから、自分がどれだけ未成熟で、社会人として通用しない人間だったか云々うんぬんと自己反省というか自己批判がつづき、これ以上御社に迷惑をかけるのは心苦しい、ついでには辞めさせていただきたい、本来ならばお伺うかがいして言うべきだとわかっていても、御社へいこうとすると身体からだが動かなくなるのです、どうぞお許つづしてくださいと綴つづられていた。二枚目の後半からは、達筆だった文字が震えだし、文脈もおかしい。でもだからこそ、心底辞めたいのだという気持ちはひしひしと伝わってきた。ほんとうに悪いことをしたと、こちらこそ詫わびたいほどだ。

この数年、森岡人形では後継者育成のために、職人枠で新人を必ずひとり採用していたが、みんな宮沢のせいで辞めていった。直に退職届を持ってきたのはひとりだけで、あとは電話かメールだ。手紙ははじめてである。

恭平は封書の消印を見た。北陸の町の名前が押してある。彼女の地元だった。鐘撞市内のアパートをでて、実家に帰ってしまったていたらしい。

こりゃ、引き止めても駄目だな。

恭平はため息をつく。

地元の服飾専門学校で、着物について勉強をしているうちに着付師の存在を知り、日本人形をつくる仕事に就きたいというのが彼女の志望動機だった。全国各地の日本人形の会社を二十社近く受け、いくつか内定をもらったものの、職人として採用になったのは、森岡人形だけだったという。勘所がよく、物覚えも早かったし、社内の評判も上々だった。オジサン達はもちろん、パートの女性達にも可愛がられていた。

それなのにまったくあの酔っ払い爺おやじときたら。

もちろん宮沢のことだ。

「なんて書いてありましたか」

幸田が訊ねてきた。一旦は自分の席に戻っていたのが、また腰をあげ、恭平の元に近づいてきた。事務室はデスクが七つあるが、いまいるのは幸田と恭平だけだ。営業の三人は外回りにでており、総務のふたりは工房で人形づくりの手伝いをしている。

じつはずぐ隣に社長室があるのだが、恭平は事務室にデスクを構え、事務仕事はここでこなすことにしているのだ。社長室自体は来客があったときの応接として使っていた。

「辞めるそうだよ、ウチの会社」

「でしようねえ」

幸田は眉を八の字にして、眉間に皺しみを寄せた。いくらなんでも大げさ過ぎる。ほとんど顔芸の域だ。

「宮沢さんにも困ったもんですなあ。このままだと後継者の育成なんて、とてもできやしない。かといって、宮沢さんを辞めさせるわけにもいきませんしねえ。どうなさいます、五代目？」

やれやれ、まったく。

どうすることもできないと、わかっているながら訊たずねてきたのだ。

幸田は恭平を快く思っていない。父が亡くなった途端、別業種会社からやってきて、社長の座におさまったのが気に入らないからだ。これは幸田に限らなかった。本社で働く従業員みんながそうなのだ。

気持ちにはわからないでもない。父と比べたら職人としては雲泥うんでいの差だし、経営者としても心許こころやすない。社長を引き継いで十年のあいだ、日本人形の売上げは下がる一方で、弟のフィギュア事業部がなければ、とうの昔に森岡人形は倒産の憂うれき目にあっていただろう。

おまえを五代目とは認めないと、酔う度に言う宮沢には辟易へきえきするが、はつきりと口にはださず、こうしてなにかにつけ、チクチクと責めてくる幸田よりもマシと言えるだろう。社長になってからほとんど毎日だが、慣れるものでもなかった。石の上に三年なんて生易しい。針のムシロに十年で、これから先もまだつづくのだ。

俺だって好きで社長になったわけじゃねえや。

父が亡くなつてすぐ、弟の慎次しんじに頼まれたので、引き受けたまでである。たとえ弟であつても、五代目になつていたら、なにかにつけ親父と比べられていたはずだ。

慎次のヤツ、それが嫌で、俺に親父の跡を継がないかと話を持ちかけてきたんだ、ぜつたい。

弟に確認したことはない。でもきつとそうだ。高校を中退し、この会社で働いているうちに、こうなることが予想できていただろう。だから父を丸めこみ、フィギュア事業部を立ちあげたにちがいない。最初のうちは引きこもっていた自室をオフィスにして、細々とやっていたのが、瞬またたく間に業績をあげ、本社近くに事務所を構え、さらに一昨年だいかんやまの春には代官山へと移った。要するに慎次は旧態依然とした森岡人形から逃げていったのだ。弟自身、こうもウマくいくとは思っていなかったのではないか。

「手は打ってあります」

「と言いますと？」

恭平の答えが意外だったらしい。幸田の眉間から皺が消えた。

「フィギュア事業部のバイトで、美大で彫塑ちようそを勉強するかたわら、日本人形も独学でやっていたひとがいますね。今日の午後、ここにきます」

「それって溝口みなぐちさんですか」

なぜ知っているのだと思ったが、幸田は代官山のオフィスにしばしば顔をだす。むこうの経理も彼が面倒見ているからだ。そしてフィギュア事業部のメンバーと呑みにいくこともあるので、溝口を知っているのも不思議ではない。彼はつづけてこうも言った。

「昨日の慰労会で、社長がお話しになっていた子でしょう？」

「うん、ああ」

「両手を握られていましたよね」

見ていたのか。

「彼女をお雇いになる？」

「いや」なんだか両手を握られたから、雇うみたいではないか。「本人がつくった日本人形を何体か持つてくるというので、それを見てから決めようかと思います」

「なるほど。真面目でイイ子ですよ」

「彼女をご存じなんですか」

「ご存じというほどではありません。フィギュア事業部のひと達と呑みにいったときに、少し会話をした程度です。でもそのときは美大や日本人形の話はでませんでしたなあ」

「代官山ではフィギュアの原型師の手伝いをしていると言っていましたか」

「そうそう。まわりの子達には本格的に原型師を目指したほうがイイと勧められていましたよ。なんでしたら私も溝口さんのつくった日本人形を見たいのですが、よろしいですかね」

「もちろんです」駄目だとは言いがたい。「幸田さんにも人形のよしあしを判断いただければ助かります」

お為ためごかしではあるが、まるきり嘘ではない。恭平よりも幸田のほうが人形について詳しいのはたしかなのだ。経理担当とはいえ、ダテに森岡人形で四十年働いていない。

「そうですか」幸田は満更まんごうでもなさそうだった。「でも社長。私は厳しいですよ。若い女の子だからって、甘い顔はしませんので」

「よろしく願います」

そもそも幸田は先代である父に十八歳で弟子入りをして、この会社で働くようになった。つまりもとは頭師かししで、峰みねよりも三年ほど後輩なのだ。恭平が四、五歳くらいまでは、工房で働いていたことになる。いつ、どんなときだったかまではさだかではないにせよ、父に怒鳴りどなつけられ、若かりし日の幸田が泣き腫はらす姿を、恭平はうつすらと覚えていた。

頭師としてモノにならなかつたから、ソロバンを弾はじくようになってくせしてよ。生産性を高めろだと。ふざけたこと又かすなつづの。



いつだか社内の新年会で、酔っ払った宮沢が幸田に絡んでいた。そのしつこさにたまりかねたのだろう、幸田はお開きになる前にもうその場を去ったくらいだ。

実際、幸田の腕前はどんなものだったのか、峰に訊ねたところだ。アイツは我慢が足らなかつたんですよ。

温厚な彼にしては珍しく、吐き捨てるように言うだけだった。

「その手紙のこと、宮沢さんに言うんですか」

幸田が言った。恭平の手にはまだ手紙が開いたままだった。

「いや、まあ」

「言ったほうがいいですって。そのうえで社長が注意しないことは、たとえ今度、溝口さんを雇うにしても、結局は宮沢さんにイビられて辞めていくだけです。この五、六年ずっとそうだったでしょう?」

ごもつとも。正論だ。しかし注意をして聞く相手ではないことも幸田はわかっているはずだ。

そのときだ。幸田の背中越しに宮沢が見えた。窓の外、舗道から敷地に自転車が入ってきたところだった。

森岡人形では職人に限って出社時間は本人次第だ。フレックスタイムという言葉がない頃、父の代からそうだった。人形づくりで多忙を極める時期は深夜遅く、ときには徹夜になる場合もあったため、

自然とそうなたらしい。それでもたいがい職人は九時前後には  
出社してくるのが常だった。

それにしても宮沢が自転車を漕ぐ速度ときたら、異様に遅い。歩  
いたほうが早いくらいで、よくも倒れないものだ。恭平はいつも不  
思議に思う。

「だいたい五代目はひとがよすぎるんですよ」

なおも話をつづける幸田は、窓に背をむけているので、宮沢には  
気づいていない。

「昨日の人形供養の蛮行ばんこうについても、きっちり叱るべきです。あんな  
ことをしようものなら、先代ならば怒鳴りつけていましたね」

親父に怒鳴りつけられて、泣いていたのはあなただでしょうが。

「私が怒鳴っても宮沢さんには効きやしません」恭平は諭すように  
言った。すでに宮沢は視界から消えていた。自転車置場は正面玄関  
を挟んでむこう側なのだ。「でも注意はします」

「ビシッと行ってください、ビシッと」

はいはい。

手紙の返事は三十分ほどで、どうにか書きおえることができた。  
あれこれ考えた末、月並みで当たりさわりのない内容になってしま  
った。森岡人形が嫌いになっても、日本人形は嫌いにならないでく

ださいと書きかけたが、やめておいた。

近場の郵便ポストまでだしにいき、そのあと事務室には戻らず、正面玄関から階段へむかう。これから頭師としての作業にかかる。しかしその前にしなければならぬことがあるので、最上階まで駆けあがっていく。

森岡人形本社は鉄筋四階建てのビルだ。建てたのは一九七〇年代後半、恭平が生まれるよりも少し前なので、かれこれ四十年以上は経つ。祖父が社長で、父は結婚したばかりの年だった。第二次ベビーブームは過ぎたものの、森岡人形が最盛期の頃である。

一階は事務室と社長室、そして昨日、慰労会をおこなった商品置場、二階は頭師と髪付師、三階は手足師と小道具師、四階は着付師の工房だ。こうして各部の作り手を集結させるために、祖父がこのビルを建てたのだ。エレベーターは人形の搬送用だったが、ここ数年は従業員の強い要望に答え、使用可にした。みんな年を取り、二階はまだしも三、四階はキツくなったのだ。

だれかしらが事務室に訪れ、恭平に直接、意見したわけではない。毎朝の出勤時、階段をのぼっていく最中、ブウブウ文句を言うのが、事務室にまで聞こえてきたのである。

恭平はもっぱら階段だ。社長だからというのもなくはない。だがそれよりもいよいよもって、でてきた腹が気になるのだ。この程度

の運動量で凹む<sup>へこ</sup>はずがないとはわかっていてもだ。

「おはようございますっ」

四階まで辿り着くと、乱れた息を整えてからフロアに入っていた。

「おはようございます」「おはようございまあす」「おはようございまあす」

応えたのはパートの女性達だ。その大半が生地の裁断やミシンでの縫製をおこなっていた。

五月人形の販売終了後、五月下旬から六月にかけて、人形販売業者向けに、翌年の雛人形の新作展示会をおこなう。その際に業者からは受注もいただけるので、これを元に大まかな生産数を割り出すことができた。そして夏前には制作に取りかかり、秋口までには作りあげてしまう。新作が一般消費者にお披露<sup>ひろめ</sup>目になるのは十一月で、その段階で評判がよく受注が増えれば、年末にかけて追加分を制作するのが例年の段取りだった。

つまり十月アタマのいまは、雛人形づくりはピークを迎えようとしているところなのだ。この時期にはふだんは三人のパートさんが十人以上に膨れあがり、着付の作業をお願いしている。いずれも鐘撞市内に住んでおり、短くても十五年、長いひとになると五十年というベテラン揃いだ。恭平の母や宮沢の奥さんも生前には彼女達と

ともに働いていた。

恭平が幼い頃は母に連れられて、弟の慎次とふたり、この工房の片隅で遊んでいたものだった。他のパートさんの子どもが訪れることもあった。

社長として戻ってきたとき、遠い過去の記憶がほぼ変わらずに存在しているのを目の当たりにして驚いたものだった。大げさではなく、幼い頃にタイムスリップをしたかのように思えたからだ。

「ご苦労様です」「お疲れ様です」「なにか問題はありませんか」「休憩はきちんと取ってくださいね」

パートさんひとりずつに声をかけていく。出張や外回りにいった際には、おみやげを持参することもあった。ご機嫌伺いというよりもご機嫌取りである。

恭平には祖父や父のように人望がない。従業員みんなに好かれていないのは百も承知だ。それでもこうした声がけは、やらないよりもやったほうがいい。気を遣うことこのうえなく、これだけでもヘトヘトになる。それでもだ。

「社長」

このフロア唯一の男性が手招きをしていた。いちばん奥の席を陣取る彼こそが着付師の遊木陽一だ。御年六十三で、いつも着物姿だった。もちろん今日もだが、いまは作業中のため、襷たすきをかけている。

人気が高い歌舞伎役者の女形おやまによく似た風貌ふうぼうで、鐘撞市の玉三郎たまさぶろうと呼ばれている。

こうしてパートさんが集まるのもひとえに遊木の人気のおかげと言っている。ただしパートさんの中には三歳年下の奥さんがおり、他のひと達に睨にらみを利きかせてはいないものの、亭主を見張っているのはたしかだった。ちなみに奥さんは着物ではない。昔は着ていたと思うのだが、いつしかやめてしまったらしい。

「どうかなさいましたか」

遊木の隣まできて訊ねた。えらく深刻ふくそうな顔つきなので、工程か材料かなにかで、問題が発生したのかと思いきやだ。

「あの子、辞めたそうですね」

「あ、はい。いましがた手紙が届きました」そう答えてからだ。「どうしてそのことをご存じで」

「幸田さんがLINEラインで報せてくれました」

なるほど。幸田はパソコンその他デジタル機器に詳しいのだ。比較的若い恭平でさえも、彼に教こえを乞うことはよくあった。

「引き止められませんかね。彼女のアパート、鐘撞第三小学校の近くでしょう。直接いって説得したらどうです？ わたくしもお供しますから」

「いえ」遊木が腰を浮かせるだけでなく、襷を外そうとするので、

恭平は慌てて止めた。「それがあの、どうやら実家に帰ってしまったらしくて、いまはもうアパートにはいないと」

「そんな」遊木は残念そうに言い、肩を落とした。ひどい落ちこみようだ。「あの子、着付師希望でしたでしょうか？　これで後継者ができると女房とふたりでよろこんでいたのに」

恭平は遊木を気の毒に思った。後継者がいないのはどの職人もおなじだ。だれも親の仕事を継ぐとうとはしない。かく言う恭平だって、以前はそうだった。弟の慎次もおなじ会社ではあるが、つくって売っているのはフィギュアである。

ただ遊木夫婦には、そもそも継ぐべき子どもがいない。三十年代後半から四十年代前半までの七、八年ものあいだ、不妊治療をつづけていたものの、とうとう子宝に恵まれることがなかったという。これは本人達からではなく、弟の慎次からの情報だ。子どもや跡継ぎの話は遊木夫婦の前ではなるべくしないようにとも釘を刺された。慎次は亡くなった母に聞いたらしい。

「原因はやはり宮沢さんの一件ですか」

「そうだと手紙には書いていませんでしたか」

「ほんと、しようがないひとだ」遊木の鼻息が荒くなった。「辞めさせろとは言いません。悔しいですが、宮沢さんが描く頭があつてこそその森岡人形ですからね。峰さんのマズくはない。だけど宮沢さ

んのと比べたら、どうしても見劣りしてしまう。もちろん社長も頑張っていていらっしやる」

取ってつけたように言われたが致し方がない。宮沢は五十年、峰は四十年、恭平はまだ十年経っていないのだ。現世でふたりに追いつくことはあり得ないと恭平自身、諦めている。ならば来世で頭師をやりたいかどうかは、それはまたべつの話だ。

「なにか策を立てないことには、新しい子を採<sup>と</sup>ったところで、おなじ結果になるだけですよ」

要するに幸田とおなじく、社長のあんたが宮沢さんをどうにかしないからイケないと非難しているわけだ。

そりゃ、俺だってどうにかしたいよ。でも何十年もの付きあいのあるあんたらができないのに、どうして俺ができるっていうんだ。

「宮沢さんもキミちゃんさえ生きてれば、あんなふうにならなかつただろうにねえ」

<sup>あわすまこ</sup>阿波須磨子がため息まじりで言った。キミちゃんとは宮沢の奥さんで、<sup>きみこ</sup>公子という名前だった。

「亡くなったのは四代目よりも二、三年前だったっけ」

須磨子の右隣から、だれに訊くとはなしに言ったのは阿波勢津子<sup>せつこ</sup>だ。



「来年で十三回忌のはずよ」須磨子の左隣に座る阿波多香子たかこが答える。「宮沢さん、ちゃんと覚えていいのかしら」

「宮沢さん家の娘さん、あの子がお嫁にいったのは、キミちゃんが亡くなる前？ あと？」

「直前よ」勢津子の問いに、ふたたび多香子が答える。「セツ姉さん、覚えてないの？ キミちゃんが大病を患って余命幾ばくもないって言うんで、慌てて結婚式を挙げたのよ。痩せ細ったキミちゃんが車椅子で披露宴にでていたでしょ」

「そうだ、そうだ」勢津子は何度も頷うなずく。「宮沢さんが泣きながら車椅子を押していたわ。あの娘さん、こっちい帰ってきてるの？」

「年に二回、盆と正月に帰ってくればいいほうよ。今年の盆にはとうとうこなかったらしいわ」

須磨子がキツイ口調で言った。

「もともと宮沢さんと娘さんって、ウマくいつてなかったのよね」その必要もないのに多香子は声を潜める。「宮沢さん、娘の結婚には反対してたし」

「してた、してた」勢津子がふたたび何度も頷いた。「披露宴でお嬢さん見たけど、羽織袴なのに、髪を金色に染めて、耳にピアスしてたもんね。反対して当然と思ったもん」

恭平がいまいるのは三階の工房だ。阿波三姉妹と作業机を挟んで、

むかひに立っていた。彼女達は小道具師である。男雛おびなであれば冠かんむりに笏しやく、太刀たち、女雛めびなは桧扇ひおうぎ、その他に鈴すずや熊手くまて、箒ほうき、鼓つづみ、琴しやみ、三味線せん、管迫はこせこといった人形の小道具をつくる職人なのだ。いまも三人は小さな扇に細い筆で絵を描いていた。

長女の須磨子は七十二歳、勢津子が六十九歳、多香子が六十六歳だ。切れ長な目に高い鼻、閉じていても口角はあがったままの口と、いうのは三人ともおなじでも、顔かたちがちがう。須磨子は細面ほそおもて、勢津子はまん丸、多香子は将棋の駒を逆さにしたようだった。それぞれ結婚しており、名字はとうの昔に阿波ではなくなっているのだが、森岡人形では旧姓を通してゐる。阿波家は代々、小道具師の家系で、三姉妹ともふたりずつ子どもがいる。それでもだれひとり跡を継ぐことなく、別の職種に就いてしまった。世の中、ままならないものだ。

「言いたくはありませんがね」

ならば言わないでくれとは言えない。須磨子は手を休め、チェーン付きの銀縁眼鏡を外し、恭平を真正面に見据えた。

「五代目がしつかりしないから、こういうことになるんだと私は思いますよ」

「申し訳ありません」と詫びるしかなかった。こういうこととは女の子がやめたことだ。三姉妹も幸田からのLINEで、手紙が届い

たのを知っていたのである。

「スウ姉さん、五代目のせいばかりにしちゃあ、いくらなんでも可哀想だわ」勢津子が口を挟んできた。「なによりも悪いのは宮沢さんなんだし。朝から酔っ払って、若い女の子の胸を鷲掴みにするなんて言語道断よ」

「でもセツ姉さん」これは多香子だ。「あの子もあの子じゃない？胸を触られたくらいで辞めちゃうなんてどうなの？ 私達なんて昔は挨拶代わりに日に三度は、宮沢さんにお尻を触られていたのよ。イヤだったけど笑って我慢してたもの」

「ほんと、いまの子は柔やわで我慢が足りないんだから」と須磨子が憎々しげに言う。

「言われてみればたしかにそうね」勢津子もまたコクコク頷いている。

そういう時代じゃないんですよと言っても、わかってはくれないだろうな。

〈遠い過去の記憶がほぼ変わらずに存在している〉のは、社内の風景だけではない。働くひと達の考え方もそうだった。それも恭平が生まれる前、父どころか祖父が社長の時分からおなじではないか。どれだけスマートフォンを使いこなし、LINEで連絡を取りあうことができててもだ。

「でももう、つぎに採用する子が午後にくるんでしょ」

背後から声が出た。手足師の熊谷道隆だ。くまがいみちたか

「いえ」恭平はふりむく。

「まだ採用するとは決まってるよ」須磨子が鋭い声で言った。

苛立ちが混じっているのがわかる口調だ。「幸田さんからのLINEいらだ

E、きちんと読んでないの？」

「はは。すみません」

熊谷はひとのよさそうな笑みで応じる。名は体を表すとはまさに彼のことだろう。背丈は百八十センチ、体重は九十キロ、そのうえ毛深いせいで熊そっくりである。顔の下半分に髭を蓄えているので尚更だ。今年六十五歳になる彼は髪の毛ばかりか、その髭も、そして腕に生えた毛にまで白いものが目立つようになった。このままでいくと白熊になりかねない。熊谷が身体を小さく丸めて、人形の手足をつくる姿はどことなく滑稽だった。熊が蜂の巣の蜂蜜を食べているように見えなくもない。そんな熊の姿を恭平は見たことはないが。

手足師はもうひとりいる。熊谷道隆の息子、良隆だ。よしたか 営業を兼任しており、いまは外回りの最中なのだ。良隆は恭平より一歳下で、しかもおなじ高校でボート部の後輩だった。昨日の人形供養および慰労会には参加していない。そのボート部のコーチで、土日は部活

にかかりきりなのだ。

「でもあれですよね、社長」ひとのいい笑顔のままで、熊谷は言った。「代官山でフィギュアをつくってる子なんでしょ？」

「え、ええ」

「昨日の慰労会にきていた女の子ですよね。社長の両手を握っていた」

そんなことまでLINEで流しているのか。

「それはあの、彼女のほうで勢い余って」

「やらし」

三姉妹のうちのだれかがうごめがくのが聞こえた。

やれやれ。

二階まで下りてきたときには、すでに十一時近かった。フロアに入ってすぐ右、窓際に空席の作業机がある。元は三代目の祖父のモノだった。祖父は昭和末期に亡くなり、そのあと四代目に就任した父が使うようになった。父が倒れたのはまさにここだ。人形の頭に顔を描いている最中、ぐらりと横に揺れたかと思ったら、床に倒れ落ちたのだという。以来、手つかずだ。父の愛用していた道具など、すべて倒れた日のままにしてある。

恭平はとてこの作業机を使う気にはならなかった。恐れ多いし、

使ったら従業員達になにを言われるか、わかったものではないからだ。

恭平はその作業机にむかうと、まぶた瞼を閉じて手をあわせた。作業をはじめの前には必ずすることだ。家に先祖代々の仏壇があり、毎朝拝んでくるものの、ここでもしないと落ち着かないのである。とりあえず今日一日無事で済みますようにとお願いするのだ。

「おはようございます」

宮沢だ。瞼を開くと、すぐ横にいた。音もなく近づいてきたらしい。

あんたは忍者か。

「宮沢さん」「大変申し訳ありませんでした」

互いの声が重なる。先をつづけたのは宮沢だった。

「昨日の人形供養では酔った勢いとは言え、五代目をはじめ、皆様にご迷惑をおかけしたことを心より反省しております。二度と酒を口にしません。神にかけて誓います」

いつもどおりの口上である。この十年で何回聞いただろう。月イチはぜったいなので、百回以上なのは確実だ。耳にタコができるよ  
うなことはないにせよ、いい加減、聞き飽きた。

宮沢にとって、これは謝罪でもなければざんげ懺悔でもない。ただの儀式なのだ。この口上は呪文のようなものに過ぎない。チチンパイプ

イですべてが元通りになると思っているのだろう。

「このとおり、どうぞお許してください」

宮沢は腰を落とすと、両膝に手を付け、深々と頭を下げた。

二階の工房には宮沢とおなじ頭師の峰と、髪付師の久佐間始くさまはじめ、そしてパートの女性が三人いる。みんな黙々と作業をつづけており、宮沢の猿芝居に気を取られることはなかった。恭平とおなじく飽きているからだ。

ビシツと言ってください、ビシツと。

幸田の声が耳の奥で甦よみがえる。鬱陶うつせうしいことこのうえない。

「頭をあげてください」恭平は言った。「昨日の件について謝る必要はありません。むしろ宮沢さんには感謝しています」

「私に感謝とはどういうことでしょうか」

姿勢を崩さずに宮沢は顔をあげた。思いも寄らぬ言葉に、訝いぶかしげな表情だ。峰や久佐間も気になったらしい。手を休めずに恭平と宮沢の様子を窺っていた。

「だって宮沢さん、あるとき父がつくった人形を救おうとなさったんですよね」

あのとときは人形供養くようの最中、住職が読経よきょうをおえて、参列者しりょうの焼香こうがはじまったときだ。宮沢は本堂に並んだ二千体にのぼる人形達にむかって走りだしたのだ。

「そ、そりゃあ、まあ。毎年、あの人形供養には先代や先々代がおつくりになった人形が何体かあるんですよ。いつも見つける度に腹が立つやら悔しいやらで。今年のはとくにそうでした。たぶん四代目が六十歳前後の、いちばん脂あぶらが乗っていた時期の人形で出来がいうえに状態もよかった。芸術品として美術館に飾ってあってもおかしくないくらいだったんですよ。それをいくら供養だからって、捨てちまうなんて正気の沙汰じゃねえや。あんまりだ」

宮沢の顔が次第に赤らんでいく。怒っているにちがいない。このひとの人形に対する情熱は本物なのだ。恭平は父の作業机を横目で見ただ。

「父が礼を言っていました」

「四代目が？」宮沢が首を傾げる。かし

「どういうことですか」

訊ねてきたのは髪付師の久佐間だ。これほど頑固一徹の職人というのを具現化した人物もいないだろう。六十七歳になる彼は、白髪しらが混じりの角刈りで、口数が少なく、いつも険しい顔つきなのだ。なのに職人になってまだ十数年足らず、その前はべつの仕事をしていたらしい。どういう経緯で髪付師になったのかは、いまいちわからないが、やたら父に恩義を感じており、ほとんど信奉者のようだった。いま口を開いたのも、父の話になったからだろう。



「今朝、父の夢を見たんです。身体を丸めて、人形の頭に筆を入れていましてね。私が近づいて声をかけても、手を休めずに作業をつづけたままでした。仕方なくその場を去ろうとしたら、父がなにか呟くのが聞こえてきました。なに？ と訊くと、父はこう言ったんですよ」恭平はわざと一拍置く。「宮沢にありがとうと伝えてほしい、と」

「ほんとですか」

「ほんとです」

嘘だ。とは言ってもまるきり嘘ではない。父の夢は時折見る。いま話したとおり、工房で仕事をしているのだが、どれだけ話しかけても一言も発することはなかった。

「四代目がこの私にお礼だなんて、身に余る光栄です」

宮沢の顔がふたたび赤くなる。しかし今度は怒っているのではない。感激しているのだ。目も赤くなり、涙を滲<sup>にじ</sup>ませていた。

「お亡くなりになってからも、私のことを気にかけてくださっていたとは」

ここまで効果があるとは思っておらず、恭平は少なからず罪悪感を感じた。しかしいまさら嘘ですとは言えない。すると宮沢はこう訊ねてきた。

「四代目は他になにか、おっしゃっていませんか」

「いえ」これ以上、嘘をつくのは心苦しい。「でも」

「でも、なんですか？」

「とても寂しそうに見えました。なにかを心配しているような」

これは嘘ではない。夢の中の父はいつもそんな佇まいたなずだった。どこからか嗚咽おえつが聞こえてきた。久佐間が男泣きをしているのだ。峰はと言えば、人形の顔を描きつづけるだけだった。

「四代目はやはり、会社のことが心残りなんですかね」

「そうかもしれません」

宮沢に真顔で言われ、恭平は思わず頷いてしまった。たしかに父の死は突然で、心残りがあつて当然と言っている。しかし夢は夢である。自分で見た夢は、自分の心の表れに過ぎず、本物の父のはずがない。わかっている。でも恭平はつづけてこう言った。

「私は不甲斐ない息子です。余計な寄り道をしたせいで、職人としては半人前どころかヒョッコも同然です。父や祖父のような腕前になることは、この先あるとは思いません」

「でしようなあ」

おためごかしでもいいから、ちよつとは否定してくれよと思わないでもない。

「創業以来、我が森岡人形めんめんに綿々と引き継がれてきた技術はいま、宮沢さん、あなたの腕に残っています。そうですね」

「そ、そりゃあ、まあ」

「できればその技術を、若い世代に教えてもらえませんか。そうすれば森岡人形をこの先、十年二十年どころか百年二百年とつづけていくことができるはずです。父もそう望んでいるとは思いませんか」  
恭平は宮沢の返事を待たずして、さらに畳みかけるように言った。  
「森岡人形の未来は、いまや宮沢さんの肩、いえ、腕にかかっていると云っても過言ではありません。どうぞお願いします」

我ながら言い過ぎだ。しかも芝居がかった物言いになっていた。  
とんだ大根役者である。もしも自分自身がこんなふうに言われたら、白けるだけだろう。ところがだ。

「五代目が頭あ下げで、こうおっしゃってますよ」久佐間が泣きながら訴えた。「森岡人形の未来のために頑張るって約束してください、宮沢さん」

「う、うっせえなあ。わかったよ。そ、それで五代目、今日の午後には早速、後釜あとがまがくるんだろ。しかもてめえでつくった人形を持つてくるって話じゃねえか」

宮沢はスマートフォンはおろか、携帯電話も持っていない。持っているもすぐなくしてしまい、遂に持たなくなってしまうのである。幸田がLINEで流した情報は峰から聞いたにちがいない。

「イイ度胸してるぜ。どんなもんか、俺も見させてもらっていいで

すかね、五代目」

「もちろんです」

そう答えながら、恭平はじつとりと嫌な汗をかいていた。美大生  
とはいえ、所詮は素人しろうとの手作りである。溝口の作った人形が、愚ぐ  
にもつかないものだったらと不安でたまらなくなったのだ。

「溝口真純ますみといいます。今日はお忙しいところ、わたくしのために  
お時間を割いていただきまして、誠にありがとうございます」

溝口はへこりとお辞儀をした。昨日はワンピースだが、今日はリ  
クルートスーツだ。キャスター付きのけっこう大きめなスーツケー  
スを引き摺ってあらわれたのは、約束の十分前だった。

この社長室に通したのは恭平だ。そして一時になったいま、溝口  
の前には恭平をはじめとして、着付師の遊木、小道具師は三姉妹を  
代表して長女の須磨子、手足師の熊谷、髪付師の久佐間、頭師の宮  
沢、そして幸田が、接客用のソファや社長用の肘付き椅子、隣の事  
務室から持ってきた椅子などに座っている。

「ええと、まずは自己紹介をさせて」

「そんなのはあとでいい」宮沢がぶっきらぼうに言った。「おまえさ  
んがどこでなにしてたかなんて関係ないんだ。てめえでつくった人  
形を持ってきたんだろ。そいつを見せてくれさえすればいいんだ」

「は、はい。それでは早速」溝口はアタツシユケースを、ゆっくり横にしてから開く。「どこに置けばよろしいでしょうか」

「机の上で」恭平が答える。だれも使っていない社長の机だ。

ケースの中には段ボール箱が入っており、その蓋を開いた。クツシヨンのために詰めてきたのだろう、丸めた新聞紙をだすと、でてきたのは二体の人形だった。

「雛人形なのか」宮沢が訊ねた。プチプチしたものが巻いてあったけれど、うっすらと中身が見えたのだ。

「はい。男雛と女雛を一体ずつ持ってきました」

そう言いながら溝口は丁寧にプチプチしたものを外し、一体ずつ机に置いていく。

「これは」宮沢が息を飲む。恭平もだ。他のひと達も机に並んだ雛人形から目を放せなくなっている。「おまえさんがつくったのか」

「はい」

「宮沢さん、このお雛様」ごくりと幸田が唾を飲みこむ音が聞こえた。「四代目のお描きになった顔と、そっくりじゃありませんか」

〈つづく〉